

刊 行 に 寄 せ て

森 口 美 都 男

京都大学文学部倫理学講座では、前々から三々五々、有志の諸君が課外に、必読の書物の輪読を続けておられた。授業とは別に、内発的に互に切磋琢磨することは重要である。私は学生諸君の一人一人に、その個性に応じてどういう勉強をされればよいか折にふれて助言はしたが、輪読会を作られたのは専ら学生諸君の自発性による。そして今回そういう幾つかの研究会の成果を世に問い、公けの批判を仰ぐという意味で『実践哲学研究』という雑誌を原則として年1回出そうという気運が学生諸君の中から自ら盛り上がって来た。刊行に私は賛成である。輪読の場合にも、互いに批判し合い、他人の批判をする時は、その2倍自己に批判的でなくてはならないが、活字にして世に問うということになれば、覚悟は一段と厳しさを増す。考えていることを書いて見ると、思ってもいなかった自分の欠点分かって来ることがある。私はこの雑誌が永続することを望んでやまない。発行責任者になれと言われれば悦んでなる。そして倫理学の専攻学生が、その視野を古代、中世、近世近代、現代の哲学全般へと拡げ、その上で事、正邪善悪については確信をもった、いやが上にも自己に厳しい人間へと成長してゆかれることを心から期待するものである。なお発刊の準備に献身された大町公、樹形公也両君の労はねぎらうに足る。